

# 研究の「種をまく」「育てる」「刈り取る」フェーズを着実に 社会実装に一步近づいた5年間

社会防災システム研究部門 部門長  
(兼)レジリエント防災・減災研究推進センター センター長 藤原 広行

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）は、2014年6月に閣議決定された「戦略的イノベーション総合戦略」において、我が国の科学技術イノベーションを強力に推進することを目的に掲げた2大国家重点プログラムの1つです。私たちがその一翼を担う「レジリエントな防災・減災機能の強化」は、SIPの重要課題の1つです。

本年度はプロジェクト開始から5年目の最終年度を迎えます。5年間の振り返ると、最も特徴的なものは2016年に発生した熊本地震と、その翌年に発生した九州北部豪雨において、私たちの開発してきたさまざまな仕組みが、実際の自治体の災害対応に活用されたことでした。

1つは、「リアルタイム被害推定・状況把握システム」です。これは最新の観測・解析技術を基盤に、災害発生直後に被害を俯瞰的に把握し、町丁目レベルでの詳細な被害測定を行うものです。熊本地震では発災10分後には面的な被害状況の分布を、完璧ではありませんが推計することができ、現地の対応に活用されました。

もう1つは、「SIP4D（府省庁連携情報共有システム）」です。これは災害対応を行う各組織が保有する情報を連携させて共有し、統合的な利活用を目指すもので、同時に私たちの研究全体を連携させるものでもあります。九州北部豪雨では土砂崩れなどが多数発生し混乱している状況のなか、研究所のメンバーが現地に入り、つくばのセンターと情報のやり取りを通じて現地の被害状況を把握する地図の作成などにあたりました。

2つの災害対応を通じ、もう少し先だろうと思われた社会への実装が前倒しされ、実現に一步近づいたことがこの5年間の重要なポイントでした。しかし、これらのことは全て、SIPが開始される前のそれぞれの、長年の着実な基盤研究があってこそ実現可能となりました。私たちはこれからも研究の「種をまく」「育てる」「刈り取る（社会実装する）」という全てのフェーズを、着実に実行していかなければならないのです。



ふじわら・ひろゆき

1989年京都大学大学院理学研究科中退。博士（理学）。1989年4月科学技術庁国立防災科学技術センター（現：防災科学技術研究所）入所。強震観測網の整備、地震動予測地図の作成、統合化地下構造データベースの開発、災害リスク情報プラットフォームの開発、リアルタイム地震被害推定システムの開発等に従事。2016年より現職。